西多賀重症児・者親の会機関誌「あゆみ：２４号」1983．寄稿原稿

校内暴力と重症児教育

最近特に 2 月、3 月になるとマスコミをにぎわすものに中学生の校内暴力事件がある。

その背景には種々の要因あり、一概にひとつの解決策というものはないであろう。でもマスコミの報道の中の彼等の言い分の中に「出席扱いするから学校に来なくていいと先生に言われた」とか、「何をしててもよいが授集の邪魔はするなと先生にいわれた」という様な（彼等のいいわけかもしれはいが)、これに類する発言を耳にする。こうしたことを知るにつけ、彼等の観方というものに何か教師として間違っているような気がしてならない。

彼等は何らかの原因があっていわゆる「校内暴力」という問題行動を起こしているのであり、この問題行動の観方というものをもう一度考え直してみる必要があるように思う。

我々は、重症児といわれる子ども達を世話しているのであるが、彼等とて問題行動といわれるものはたくさん持っている。

従来はこうした問題行動は「重度の知恵遅れの子どもは多かれ少なかれ持つもの」のように考えられてきた。しかし最近は「問鈍行動といわれるものは、子どもの内面の叫びであり次の発達へのあがきでないだろうか」、また「それら問題行動に対処する方法がみつからない折は、その問題行動を大きく取り上げるよりも彼等はどこかで我々とふれ合う場を求めているはず。その求めている行動を早く我々がみつけ出し、その係わり合いを少しずつ多くして行くことがいわゆる問題行動解決への糸口にもなるのでないか」という観方（考え方）が主流となりつつある。

確かに一つの考え方であり、例えば、A ちゃんはガラスたたきをする。それは問題行動である。しかしガラスをたたくという表現を使って A ちゃんは、何かを訴えているのかもしれない。例えばいつも手元にある玩具を探している（手元に欲しい）サインかもしれないし、コート（大便）をして気持が悪いというサインかもしれない。それをサインとして我々が理解するために、A ちゃんとつき合って行くしかない。現にこうしてサインとして我々がつかんだケースもある。

つまり、ガラスたたきを「知恵遅れの子のもつ問題行動だから…」と観てしまうか、「何かを訴えるサインでないか」と観て行くか。観方で子どもの扱い方は大きく異なってくる

面を持っている。

中学生の問題にもどって考えてみると、「おちこぼれだから」と観てしまって学校、授業からボイコットしてしまっていいのだろうか。確かに学校、授業は成立しても、ボイコットされた一人一人の子どもの教育はどうなってしまうのであろうか。

やはり彼らの問題行動を何かの叫びと受けとめて上げる姿勢が一方に重要でははいだろうか（特に義務教育においてはー）。

もちろん教師だけでなく、家庭、社会にまで及ぶ問題であろう。しかし、まず彼等の叫びのなか味を知ることが、本質的な、建設的な解決策へつながるものと思う。

現代人は余りにも何かを求めて必至であるがために、どこか索漠としている。そしてだいじな心と心のふれ合いを置き忘れていっているのでないだろうか。こうした社会（大人）構造を中学生は鏡に映しているのかもしれない。

そういえば TV ではトーク番組が人気を呼び、又便利屋という職業への依頼に「話し相手が欲しい」というものもあると聞く。こうしたこともやはり索漠さを映し出しているのかもしれない。人と人は確かに毎日つき合って生活はしているが、どこか孤独なのかもしれない。

もう一度一人一人が心ふれ合う喜びを確認し、互の人格を認め合う社会へ出直す勇気がたいせつな気がする。

よく言われることだが一人では人間でない。人と人の間にこそ人間が存在するといわれ、それ故「人間」と書くと言う。また人間の間の字は「間（ま）」でもあるという。問を無くして無意識に我々は人の心の中へ土足で踏み込んではいないだろうか。今一度間（は）を持って人に対処したいものである。

話はかわるが、寅さんシリーズはあいかわらずの人気である。考えるに、寅さんは何かに必至には生きてはいない。そのおおらかさで心のふれ合いを唯ーの喜びのごとく生きているだけの様でもある。映画を観る我々は、やはり寅さんに失われつつあるもの、でも再び呼び戻さねばならないものを観ているのかもしれません。

重症児といわれる子ども等を観ていて、ふと最近の世相に感じたままをつれづれに書いてみただけである。